

## 第5章

# 特徴的な学校の取組

- ・鳥取市立宝木小学校
- ・鳥取市立青谷中学校
- ・鳥取市立湖南学園
- ・米子市立河崎小学校
- ・米子市立尚徳中学校

児童生徒の学力の伸びが大きい学校や、非認知能力・学習方略の数値が高い学校を訪問し、学校で意識して取り組んでいることを聞き取りました。

児童生徒の学力の伸びや、学力の下支えとなる非認知能力や学習方略を高めるために効果があると思われる取組を紹介します。



# 全ての児童が「わかった」「できた」と実感できる授業づくり

## ～鳥取市立宝木小学校～

### 1 とっとり学力・学習状況調査の状況

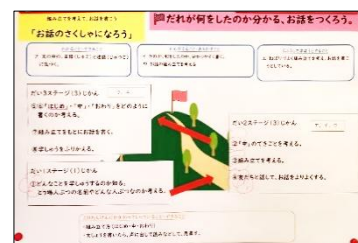
【学力レベル】6年生は、国語、算数とも県平均を上回るとともに、6年生の算数では学力を伸ばした児童の割合が100%、国語では80%であった。学力の伸び率も国語と算数で県平均を上回っている。

【主体的・対話的で深い学びの実施】5年生は昨年よりも伸ばしており、県平均を上回る。6年生も県平均と同等であった。（中学1年生は県平均以上に伸ばした。）

【学習方略等】柔軟的方略、プランニング方略、認知的方略、努力調整方略、自己効力感をどの学年も伸ばしている。5年生では特に認知的方略と努力調整方略の伸びが顕著であり、6年生では、作業方略、認知的方略、努力調整方略、自己効力感の伸びが顕著で、県平均を上回る。

### 2 効果があると考えられる取組

全ての児童が「わかった」「できた」と実感できる国語科の授業づくりに取り組んでおり、ICTを活用し児童が考えを共有する場面の設定をする等の協働的な学びや、ルーブリック、ラーニング・マウンテンを活用し、ゴールの見える授業を展開している。また、算数科においては児童同士の言葉で伝え合うグループ活動に取り組んだり、適用題を解く時間を十分に確保したりしている。



ラーニング・マウンテンの活用

※ラーニング・マウンテン…「Let's Climb the Mountains of Learning」(学びの山に登ろう)の略称で、各教科等の単元や題材のまとまりを「山登り」に例えたもの。(大妻女子大学 樺山敏郎教授提唱)

#### (1) 全ての児童が「わかった」「できた」と実感できる授業づくり

学習を進める上で大切にしていきたい視点として、「ICTを活用し、児童が考えを共有する場面の設定」「ゴールの見える授業を展開する」の2つの視点に重点を置いて実践してきた。また、ゴールの見える授業展開を目指して「学習の見通しをもたせること」「レポートをまとめる活動において3Z(時間・字数・条件)を示すこと」を意識している。

##### ① ICTを活用し、児童が考えを共有する場面の設定

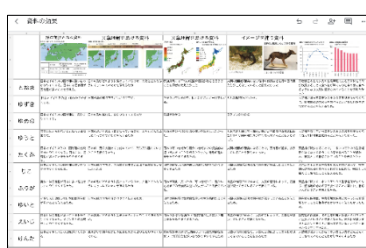
ICTを活用することで、児童は自身の考えをアウトプットしやすくなり、友達の意見を参考にして考えを広げたり深めたりすることができた。特に、ジャムボードやスプレッドシート、スライドなどを使用した共同編集や共有活動が効果的で、自分で考えることが難しい児童にとって支援となった。また、国語のグループ発表や学習のまとめ場面では、他者参照を通じて学びを深めることができ、視覚的に分かりやすい資料作りにも役立った。児童はこれらのツールを使い慣れており、楽しみながら活動に取り組むことができたことが、主体的・対話的で深い学びの実現につながったと考えられる。



共同編集の様子



ジャムボードでの共同作業



スプレッドシートでの共有活動



オクリンクによる他者参照



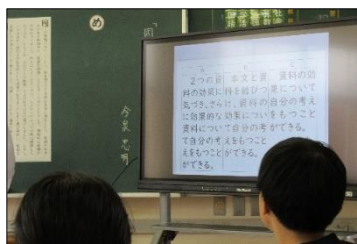
自分の考えをまとめて発信する手段も選べるようになった



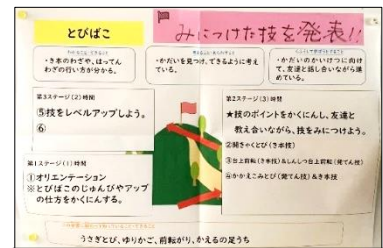
社会科の都道府県クイズ

## ② ルーブリック、ラーニング・マウンテンを活用し、ゴールの見える授業を展開する

ルーブリックやラーニング・マウンテンを活用することで、児童は学習の見通しを持ち、ゴールを明確に意識しながら主体的に取り組むことができた。また、ルーブリックの評価基準（A・B・C）を児童と共有し、その違いを理解した上で学習を進めたことで、学習へのモチベーションの向上や学習目標の達成につながった。また、ラーニング・マウンテンの活用により児童は目標を明確に意識し、安心感を持ちながら計画を立てたり柔軟に修正したりすることができた。この取組は国語科だけでなく体育科、また特別支援学級での授業にも応用され、教師の授業の進め方にも良い変化をもたらした。以上のような実践が学習方略の伸びにつながったと考えられる。



ルーブリックの共有



体育にもラーニング・マウンテンを活用

## （2）算数科における「適用題の時間」の取組

教師は、めあてがはっきりとした授業、児童に付けたい力が明確に示された授業づくりに取り組んでいる。特に、算数科では授業時間の約半分を適用題に取り組む時間として確保し、適用題として何種類かの課題を準備した。これらのことが、学力レベルの伸びにつながったと考えられる。

## （3）子ども同士の言葉で伝え合うグループ活動

グループ活動では、教師はファシリテート役に徹して、児童同士が話をする授業に取り組んでいる。教師の言葉ではなく、児童同士の言葉でわかる児童もあり、児童が自分の言葉で友達に伝えることでお互いの考えが深まったり、新たな視点が得られたり、気づきを得られたりしていた。児童の活躍場面を確保することにもつながった。このことにより、いろいろなことに挑戦しようとする児童が増え、主体的・対話的で深い学びの実施の向上につながったと考えられる。



算数の時間のグループ活動

## （4）「個別対応の家庭学習」の取組について

学力の二極化への対応として、一律の宿題ではなく、個別対応の宿題を導入し、児童一人一人に合った学習を支援した。その結果、自学に積極的に取り組む児童が増え、主体的な学びが促進された。※注1「けてぶれ（計画・テスト・分析・練習）」に取り組み、児童は自ら目標を立て計画を実行し、振り返る習慣を身につけた。宿題の量や内容も自由とし、学習方法の選択肢を広げる中で、児童は自己調整力を養い、効果的な学習方法を身に付けた。ICTや紙等を活用して自分の考えをまとめる手段も選べるようになり、中学校進学への準備としても有意義な取組となった。教師はきめ細やかな指導をしつつ、手を出しすぎないよう配慮し、児童が主体的に学びを進める環境を整えた。

※注1 参考：「けてぶれ学習法」葛原祥太



「けてぶれ」の手本の掲示例

# 「探究あおや」を軸とした授業づくり ～鳥取市立青谷中学校～

## 1 とっとり学力・学習状況調査の状況

【学力レベル】2年生は、国語・数学ともに「学力を伸ばした児童生徒の割合」が80%を上回り、「学力の伸び率」も県の数値より高い。数学においては、「学力の伸び率」が県の数値を大きく上回っている。また、3年生は、国語・数学ともに「学力を伸ばした児童生徒の割合」が県の数値より高く、国語においては、県の数値を大きく上回り「学力の伸び率」も高い。

【学習方略等】2年生では「主体的・対話的で深い学びの実施」「プランニング方略」「努力調整方略」が県の数値より高い。3年生では「主体的・対話的で深い学びの実施」の数値の伸びが見られる。

## 2 効果があると考えられる取組

「探究あおや」（ふるさとを思う心を育み、自己の生き方を見つめる）の推進（生徒の主体性・協働性・表現力の育成）及び「探究あおや」の授業づくりを基盤とした他教科等の授業改善に取り組んでいる。

文部科学省の教育課程特例校認定を受け、教員が、「探究あおや」（1年：大地、2年：紙、3年：海をテーマにした「総合的な学習の時間」と「特別活動」とを融合した特別の教科）のカリキュラムを充実させるとともに、探究スキルや探究的な学習についての考えの共有・深化を図っている。さらに、教員が協働しながら、他教科等における探究スキルを生かした授業づくり、「自ら学びたい」という意欲を引き出したり生徒に「学び方」を学ぶことを意識させたりする工夫等を行っていくことが、生徒の意欲や主体的な学びにつながり、学力等を伸ばしていると考えられる。

### （1）「探究あおや」の推進（生徒の主体性・協働性・表現力の育成）

令和5年度から教育課程特例校として実施している「探究あおや」、「地域と連携したふるさとキャリア教育推進事業」を活用した取組を行っており、本年度は2年目である。令和6年度の学校教育目標を「少数精鋭～自らの未来を切り拓く青谷町教育の推進～」とし、「探究あおや」の推進（生徒の主体性・協働性・表現力の育成）を図り、研究を推進している。

「探究あおや」では、探究的な学習の過程を重視し、探究的な学習における4つのプロセス（「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」）の質的充実を目指している。

「探究あおや」の取組の一つである「未来の青谷創造プロジェクト（通称：みらあおプロジェクト）」では、青谷小学校と青谷中学校の児童生徒が青谷町のためにできることを一緒に考え行動する取組を行っている。青谷小学校6年生と青谷中学校3年生が、地域の方にコーディネーターをしていただきながら、青谷の未来について語る「みらあお会議」を行い、青谷のためにできることを語り合い、取組を決め、実行した。毎年地域の魅力を創り出し、広めていく活動を行っている。

5月には、講師の日本海テレビ岩本泰平アナウンサーからインタビ



「みらあお会議」



「みらあおプロジェクト」

ューの仕方や伝え方についてのレクチャーを受け、インタビューをするときに何を大切にするかということについて考え、話し合った。

さまざまな活動の中で、地域の方やゲストティーチャー等、多くの方々と関わり合い、大人のロールモデルを見たり声を掛けてもらったりしながら、自分の考えを人に伝えてもよいという安心感や、発言することを通して学校生活をよりよくしていこうという雰囲気の中で、正義感のある言動をする生徒の姿が見られるようになった。また、小規模校ならではの少人数学級や担任の持ち上がり等の強みを生かし、人間関係を熟成させることが生徒の非認知能力を高めることにつながっているのではないかと考える。



2年生「青谷和紙づくり体験」材料加工と紙すきの様子



1年生「CHA<sup>3</sup>プログラム」



「探究あおや」の出前授業

## (2)「探究あおや」を基盤とする授業づくり

教員が、「探究あおや」で実践している探究的な学習の過程についての共通認識を持ち、学習の基盤となる資質・能力を育成することを目指し、各教科等の授業において、探究的な学習における4つのプロセスを生徒に意識させた授業づくりを進めている。

同時に、探究的なスキルを身に付け、知識及び技能を習得するためにどのように学ぶのか、「学び方を学ぶ」ということも意識をして主体的な学びができるよう工夫と試行錯誤をしながら行っている。生徒は、探究的な学習におけるプロセスの「まとめ・表現」の場面において、よりよい発表となるよう個人で練習を重ねたりペアやグループで話し合ったりして自分たちの納得のいくまとめや発表をすることを通し、人前で発表することへの自信や意欲を持ちつつある。



「まとめ・発表」の準備

### ①ペアやグループでの活動

数学の授業では、学習のためのペアをつくり、ペアで問題を解いて解説し合ったり、理解できたかどうかを説明し合って確認したりしている。他の教科でも、ペアやグループで対話をする機会を多く設け、協働的な学びができるよう仕組んでいる。

### ②情報活用能力のプロセスを意識した取組

その中で、今は「情報の収集」の時間、今は「整理・分析」の時間等と生徒とともに確認し、生徒に意識付けをさせた上で、各活動に取り組ませている。

「探究あおや」と同様、3年間を通して同じ教員が教科指導を担当し、生徒の成長過程や実態をよく把握しているため、安心感と信頼感の中で学習している。また、教師と生徒が、「探究あおや」を軸としながら、試行錯誤、様々な工夫や新しいことへのチャレンジ等をし、ともに学びを創っているということも、生徒の主体性、学習意欲及び学力向上等につながったと考えられる。



3年生「アストロセミナー」

# たてわり活動による主体的に取り組む児童生徒の育成と協働的な学びを意識した授業づくりによる表現力の醸成 ～鳥取市立湖南学園～

## 1 とっとり学力・学習状況調査の状況

【学力レベル】7年生では、国語・数学ともに「学力レベル」が向上しており、「学力を伸ばした割合」「学力の伸び率」で県平均を上回る。

【主体的・対話的で深い学びの実施】7年生、8年生、9年生が伸ばしている。

【学習方略】7年生は、「柔軟的方略」「プランニング方略」「作業方略」「認知的方略」「努力調整方略」を伸ばしている。

【非認知能力】7年生は、「勤勉性」を、9年生は「自制心」を伸ばしている。

## 2 効果があると考えられる取組

学年を3つ（初等、中等、高等）のブロックに分け、成長の節目を設定。発達段階に応じた学級・学校づくりを行い、児童生徒の主体的な学習を促す学習展開の工夫により、学習方略や学力レベルを伸ばしている。特に顕著な伸びの見られる昨年度6年生（現7年生：中等ブロック）や学校全体の取組を紹介する。

### （1）たてわり活動によるリーダー育成と主体的に取り組む児童生徒の育成

年度当初に全校で「たてわりチーム」を結成し、全校遠足、体育祭、こなん駅伝においてはたてわりリーダー、学園祭においては各ブロックリーダーを中心に、学校行事等を児童生徒の手で主体的につくりあげている。

「たてわり活動」では、全校を4つのチームに分け、4・7・8・9年生がリーダーとなり活動内容や練習計画等を考え、チームをリードしていく。内容を決める際には、教員とリーダーで組織する実行委員会を開催し、児童生徒の想いを教員に伝える等、主体的な取組となるよう工夫がなされている。フォロワーとなる学年は、リーダーの姿をモデルとして、ブロックや学園全体の最上級生になったときには自分がリーダーとなってチームをリードしていきたいという意欲を高めている。



体育祭実行委員会の様子



リーダーによる競技の説明

### （2）協働的な学びを意識した授業づくりによる表現力の醸成

安心・安全な環境づくりや自治的な活動等により醸成された人間関係を活かし、多様な人との協働的な学びの場面設定を意識するとともに、表現力の醸成を目指した授業づくりを校内研究として設定。また、児童生徒の姿として「自力解決の場面で自分の考えを持つ」「協働的に学ぶ」「自分の考えを見直す」というサイクルを学習の中で大切にする等、自己調整できる児童生徒の育成を目指している。



協働的な学びの場面

## ① 安心・安全な学習集団づくり

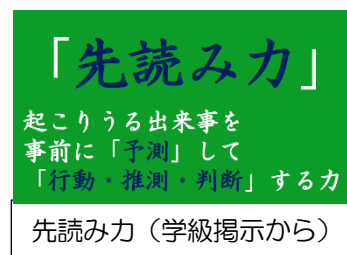
中等ブロック（5年生）の段階から、中学生という立場を意識する指導を行う。言われなくても先を見通して行動すること、安心・安全な環境が人を育ててくれること等を繰り返し指導した。また、環境づくりのために「場を整える」ことを意識した学級経営を行う。さらに、学習規律・準備物・教室内の整頓等を、児童生徒自身が気付いて整えられるよう指導する。このことで、教室内に安心・安全が担保され、誰に対しても自分を表現できる居場所となった。

算数・数学科では、学習の流れをフレーム化。問題提示、めあての確認、自力解決の時間を設定し、自分の考えを持つことを習慣付けた。

また、全体での共有の場面で学習をまとめ、適用題で学習したことを確かめる等、自分の考えを他者に伝え、他者の考えを聞くことにより自分の考えを修正したりブラッシュアップしたりして学びを深める時間を設定。この実践の成果として、調査結果の分析から、柔軟的方略・認知的方略の伸びに加え、課題提出の習慣も身に付いたことから作業方略の伸びへとつながったと考えられる。

## ② 教科担任制・教科担当制を展開

義務教育学校の強みを生かした取組として、「教科担任制・教科担当制」を実施。「教科担任制・教科担当制」を実施することで、専門性を活かして子どもたちの知りたい、わかりたいという高いニーズに応えられるようにしたり、指導の連続性等を意識した授業実践につなげたりしている。また、複数の教員が多面的に情報共有することで、一人一人の育ちや学びに対する様々な気づきや指導が融合し、安心・安全な学習集団づくりにつながると考える。

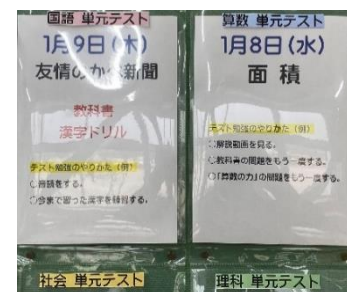


|        | 初等ブロック |    |    |    | 中等ブロック |    |    |    | 高等ブロック |     |     |     |
|--------|--------|----|----|----|--------|----|----|----|--------|-----|-----|-----|
| 教科     | 1年     | 2年 | 3年 | 4年 | 5年     | 6年 | 7年 | 8年 | 9年     | 10年 | 11年 | 12年 |
| 国語     |        |    |    |    |        |    |    |    |        |     |     |     |
| 算数・数学  |        |    |    |    |        |    |    |    |        |     |     |     |
| 社会     |        |    |    |    |        |    |    |    |        |     |     |     |
| 理科     |        |    |    |    |        |    |    |    |        |     |     |     |
| 音楽     |        |    |    |    |        |    |    |    |        |     |     |     |
| 図工・美術  |        |    |    |    |        |    |    |    |        |     |     |     |
| 体育・保健  |        |    |    |    |        |    |    |    |        |     |     |     |
| 英語     |        |    |    |    |        |    |    |    |        |     |     |     |
| 外国語・英語 |        |    |    |    |        |    |    |    |        |     |     |     |
| 道徳     |        |    |    |    |        |    |    |    |        |     |     |     |
| 学芸     |        |    |    |    |        |    |    |    |        |     |     |     |
| 総合     |        |    |    |    |        |    |    |    |        |     |     |     |
| 自立     |        |    |    |    |        |    |    |    |        |     |     |     |

教科担任制（緑色）・教科担当制（オレンジ色）

## ③ 単元テストによる学習の見直し・振り返り

後期課程の定期テストは廃止し、短いスパンで学習の見直しや振り返りができるように、単元テストを実施。この単元テストは全学年の取組で、各教室には単元テストを知らせる掲示物があり、日程の他に「テスト勉強のやり方」を示している学級もある。このことが、柔軟的方略・プランニング方略・努力調整方略の伸びにつながっていると考えられる。また、短いスパンで学習内容を確認、きめ細かな指導を積み重ねることができるという点から、国語、算数・数学ともに、基礎的・基本的な知識及び技能の習得により、学力分析における下位児童生徒の割合の減少につながったと考えられる。



単元テストの予告掲示物

## ④ 特設教科「拓」（ひらく）の取組

特設教科「拓」では、地域の方々（協働指導者）と関わりながら、湖南地区の歴史・自然・文化・産業・人々について探究的に全校で学んでいる。「拓」を通して、「ふるさとや自己の生き方を考え、未来を拓く」ことを目標としている。協働指導者の話を聞くだけでなく、自分が疑問に思っていること等を直接尋ね、対話することで、地域や自分の課題を解決しようとする姿が見られる。このことが、「主体的・対話的で深い学びの実施」の伸びにつながっていると考える。また、鳥取県教育の重点に掲げている、「自分の考えを持ち、工夫して表現する子どもの育成」に向けた実践がなされていると考える。



特設教科「拓」の様子

# 豊かに学び合い 確かな学力を身につける子の育成 分かる喜びのある算数の授業づくり ～米子市立河崎小学校～

## 1 とっとり学力・学習状況調査の状況

【学力レベル】国語、算数ともに学力レベルが伸びている。特に、5年生の算数は「学力を伸ばした児童の割合」で県平均を上回り、6年生の算数は「学力の伸び率」で県平均を上回っており、どちらも、下位層において伸びた児童が多い。

【主体的・対話的で深い学びの実施】5、6年生ともに県平均を上回っている。

【学習方略】5年生は、すべての項目において伸びが県平均を上回っており、6年生は、柔軟的方略、プランニング方略、作業方略、認知的方略、努力調整方略の伸びが県平均を上回っている。

【非認知能力】5、6年生ともに自己効力感が県平均を上回っている。

## 2 効果があると考えられる取組

河崎小学校では、令和4年度から算数科を研究教科として研究に取り組んでいる。1年目は、主に児童が算数用語に触れる環境づくりや実態把握に努めた。2年目は、1年目に行ったテスト結果の分析を基に、教師の授業改善や児童が基礎基本を身につけられる取組の充実に努めた。

### (1)「めあてーまとめ・振り返り」のある授業づくり

「めあてとまとめの正対」を意識した授業づくりにはこれまでも取り組んできたが、「授業づくりシート（米子市）」を活用することで、全学級で、教師がねらいを明確にした授業実践を行うことができた。また、振り返りに関してはレベル表を作成し、児童が振り返る際の視点を様々な角度から提示した。

### (2) 普段の授業の中での「分かった」を大切にする適用題の時間

タイムマネジメントを意識して授業を行うことで、児童が個人で問題に取り組む時間を確保した。算数が苦手な児童が繰り返し考えたり、得意な児童がデジタルドリル等を活用して多くの問題を解いたりできるようにした。

### (3)「分からない」「なぜ」と言える雰囲気づくり

5年生では、算数の時間に少人数指導を取り入れた。学年を同じような学力になるように2クラスに分け、授業者同士で相談するとともに適宜クラス替えをしながら進めた。授業の中では、算数ペアをつくり、児童が教え合うことで力を伸ばせるようにした。話し合う際は、分かる子が分からない子に「教えてあげよう」ではなく、分からない子が分かる子に「分からない」と言えることを大切にして取り組むことで、分からないことを質問できる雰囲気づくりが培われていった。テストを返却する際も、班の中で間違えた問題や分からない問題を相談し合う機会を作った。

このような取組が、学力レベルや学習方略（認知的方略）の伸び、自己効力感の高まりにつながったと考えられる。

授業づくりシート

| 学びの振り返り |                                                                 |
|---------|-----------------------------------------------------------------|
| ☆レベル5   | 新たな疑問<br>〇〇の時は、どうなるのだろう                                         |
| ☆レベル4   | 学びのつながり<br>こんなことにも〇〇が使える<br>この学習は、生活の中の〇〇に生かせる<br>〇〇の学習とつながっている |
| ☆レベル3   | 自分の変化・成長<br>～考えが変わった<br>～する力がついた                                |
| ☆レベル2   | 解決の仕方<br>～〇〇を使った発言を聞いて～<br>～さんと同じ方法で～<br>～〇〇を使って計算したら～          |
| ☆レベル1   | 分かったこと<br>～が分かった<br>～を知ることができた<br>～と納得できた                       |

振り返りレベル表



算数ペア

### ①パワーアップタイム（朝の帯時間）

## ②家庭学習の啓発

# 1・2年生

がらがらいうじさん

## 学習時間20分

### めあて じぶんから つくえにむかう しゅうかんを みにつける。

#### 家ていしゅうかのポイント

**ポイント①** きそく<sup>きそく</sup>を<sup>きそく</sup>正しい生活しゅうかんの<sup>きそく</sup>たしかめと見なおしを

～ 時間をきめて 生活しよう ～

時間をいしをしじめをつけ、きそく<sup>きそく</sup>正しい生活をおくることで、しゅうかのしゅうかんが<sup>きそく</sup>まよります。とくに、「おきろくこく」「しゅうかのするおきろくこく」「テレビやゲームなどをする時間」「ねるおきろくこく」などについては、家ぞく<sup>きそく</sup>で<sup>きそく</sup>おきろくこくいながらルールをきめて、じぶんでまもるよう<sup>きそく</sup>に<sup>きそく</sup>していくことが大切です。

**ポイント②** しゅうかい<sup>しゅうかい</sup>の<sup>しゅうかい</sup>しゅうしゆ<sup>しゅうしゆ</sup>にも チャレンジを

～ すずんで<sup>しゅうしゆ</sup>おきろくこくも<sup>しゅうしゆ</sup>もとう ～

てい<sup>しゅうしゆ</sup>の<sup>しゅうしゆ</sup>うちから、学校で<sup>しゅうしゆ</sup>しゅうしたことをふくしゅうしたり、「じぶんしゅうか」にすんで<sup>しゅうしゆ</sup>り<sup>しゅうしゆ</sup>おきろくこく<sup>しゅうしゆ</sup>します。

#### 家ていしゅうかのめあて

**目標** 教科書の文や字を、すらすら読めるようになるまで、毎日1冊に読んで音読しましょう。

かん字ドリルを見ながら、かん字やカタカナを一語ずつゆくりまわし読むしゅうをしましょう。

字を書くときは、正しいひつひのつくりでめ、はね、はらにそって書いて、ていねいに書きましょう。

おきろくこくうけしゅうしたことを、おきろくこくした、おきろくこくしたことを、音読にまわしましょう。

じぶんで本を読んだり、おきろくこくの人に読み聞かせをしてもらったりしましょう。

**目標** 正しいおきろくこくでできるよう、かん字ドリルのめいどいをノーマにねんしゅうしましょう。

まちがっためいどいは、おきろくこくらずもう一度やりなおすようにしましょう。

じゅうかをしきよくつづいて、進級がねるようになりますように。(2年)



### （５）学びの土台となる仲間づくり

### ①児童が企画して行うプロジェクトチームの活動

## ②児童のつながりを大切にした活動



## 学習発表会後の児童玄関

# 自ら学び 互いに語り合い 社会とつながる生徒の育成 一人一人を大切に作る手立てを生かし、生徒を最大限のばす教育を通して ～米子市立尚徳中学校～

## 1 とっとり学力・学習状況調査の状況

【学力レベル】国語、数学ともに学力レベルが伸びており、「学力の伸び率」でも県平均を上回っている。特に、数学の「学力を伸ばした生徒の割合」が高い。

【学習方略】2年生、3年生ともに柔軟的方略、プランニング方略、作業方略の項目において、県平均を上回っている。特に2年生は、すべての項目において、県平均を上回っている。

【非認知能力】2年生、3年生ともに自己効力感が県平均を上回っている。

## 2 効果があると考えられる取組

尚徳中学校では、生徒同士が対話を重ね協働することを通して自己理解を深められるよう、アウトプットの場を学習展開に積極的に取り入れている。その中でも、特に顕著な伸びの見られる数学科の取組を中心に紹介する。

### (1) アウトプットの場面を取り入れた授業づくり

#### ①学年に応じた授業形態の工夫

令和5年度の1年生（2学級）では、数学科において各学級をそれぞれ半分に分けて少人数で授業を行うことで、教員が生徒一人一人に関わる時間が増え、丁寧な見取りを行うことが可能となった。同じ学級の半分の生徒は他教科を学習するよう時間割を工夫することで、どの学級も同じ授業者が担当でき、学習状況を把握できるようにした。また、空き教室を数学教室として活用し、学習の場を設定することで、既習内容の掲示等ができ、生徒がいつでも振り返ることができるようにした。2年生では、毎週1時間を活用・演習・補充ができるような時間として設定した。

多くの問題に触れる機会をつくり、活用問題集（B-P L A N）を使って発展的な問題にも取り組んだ。

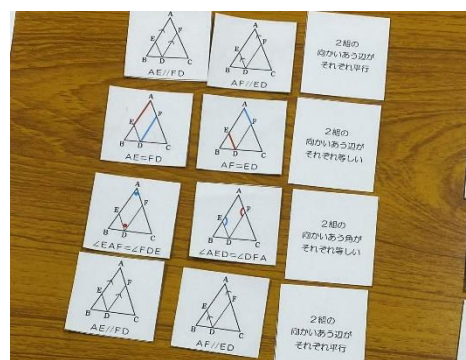


数学教室の様子

#### ②学習意欲を高めるウォーミングアップの工夫

生徒が授業の最初からつまづかないように、ウォーミングアップの場面で、e ライブラリを活用したり、100マス計算を繰り返し行ったりするなど、様々なバリエーションを用意し、生徒の学習意欲を高められるように工夫している。

その中で特徴的なものとして、平行四辺形になるための条件が書かれたカードと図形とを組み合わせるカードゲームを班で行っている。ゲーム性の要素を取り入れることで、どの生徒も意欲的に取り組みながら基礎基本を繰り返し学習できるようになっている。



実際のカード

### ③本時の課題に迫るためのアウトプットの場面の設定

生徒は自分の言葉で説明ができること、友だちの説明について気づいたことを返してあげることなどを意識して「アウトプットタイム」に取り組んでいる。本時の課題にせまるために、まずは個人で取り組む時間を設定し、その後にフリータイムを設けている。フリータイムでは、アウトプットタイムで自分の考えを説明できるように、理解が不十分であったり、説明が苦手だったりする生徒は自由に席を移動して積極的に友だちに聞きに行くように促す。また、教員によるミニ講座の場も設定し、生徒は学習する方法を自分で選択できるようになっている。その際に、時間を持て余す生徒が出ないよう、時間設定を細かく設定するなどの工夫をしている。

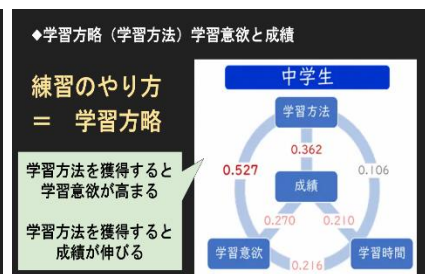
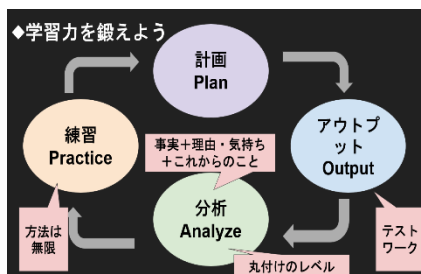
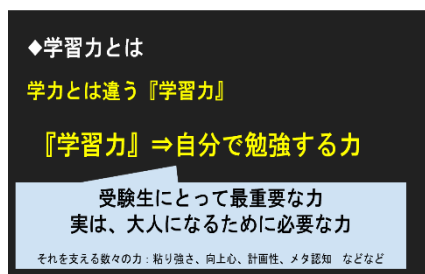
このような取組の継続が学力レベルや学習方略の柔軟的方略の値の伸びにつながっていると考えられる。



フリータイムの様子

### （２）学習方略を生徒と一緒に共有する取組

令和5年度の2年生では、進級するにあたって受験生としての意識づけを行うために、学年集会で学習方略について様々なデータを示しながら説明する機会を何度か設定した。生徒は学習方略とは何かを具体的に知り、自分に合った学習方法を考えることで、日々の課題への取組やテスト期間の勉強法を振り返ることができた。このような取組も学習方略の柔軟的方略やプランニング方略の値の伸びにつながっていると考えられる。



### （３）縦のつながりを意識した行事の設定

行事では、各学級を分けた縦割り活動を取り入れている。3年生が中心となり練習の段階から自分たちで計画し、試行錯誤しながら取り組んでいる。その中でも特徴的なものとして、学校づくり会議がある。縦割り活動のグループが各教室に分かれて、各学年が混ざった班でテーマ（日常生活での課題について等）に沿って話し合いを行う。3年生が司会進行を行い、アイスブレイクを自分たちで考えている。リーダーやサブリーダーの役割を果たしたことで、自信を持ち行動できるようになった。また、1・2年生も身近な手本となる3年生を見ながら、日々の生活につなげて、やるべきことを自ら考え行動にうつす姿が見られるようになってきた。

このような取組が、自己効力感や勤勉性といった非認知能力の育成にもつながっていると考えられる。



会議の様子